

統一

第七十五號

明治三十二年九月十五日(舊曆八月十五日)發行

目次

釋尊中心の佛教
 常恒不斷の努力
 嗚呼九月十二日
 囑目篇
 報道廣告等

本多日生
 關田養叔
 惠日山人
 篁堂

本報は去る六月六日横濱佛教公會堂に於て本多、正正が演説せられ、統一新聞に連載しなるものなるが、今回本誌にその全編を掲載することにせしめ、

釋尊中心の佛教

本多日生 講演

釋尊中心の説に就て

扱て此釋尊中心の説は種々の方面から考察するとが出來ますが、教理的にお話をするには、佛教の一切經に就て論じ、更に佛教歴史の全体に涉つてお話をしなければならぬ、けれども今日は時間が充分でありませぬから、詳しいお話は出來ませぬが、大體文は佛教經典の全體から考察し……又佛教歴史の全體から批判する考てありませぬ、尙其前に述べたいのは、現代の佛教徒の傾向は何うなつて居るか、又日本佛教徒の責任を果すには何う云ふ事を覺悟しなければならぬか、斯の點に就いて意見をのべたいと思ひます。

公明正大の傾向

(1) 現今の佛教界の思想は色々に別れて居る様であるが、

極く古い宗派觀念に囚はれて居る體と、夫を離れて新らしく光明あり活力ある佛教を創設する體との二つに分つて出來ます、日本は其二つの傾向の何方が勢力あるかと云ふと、或宗派に附いて居る權家でも、其思想は其宗派を超越して最う一つ公明正大なる佛教の眞價を得たいと云ふ意嚮を持つて居る、之れは何處の權家で、之れは何宗の信者であると、人一人を部別しなると、新しい人は少ないが、人々の其頭腦を分解して見ると公明正大なる佛教の信念に這入らうと云ふ者が廣くなつて居ります。

純白な性情

今日では、餘程古いお爺さんお婆さんでも昔の儘の信仰でなく、進まうと思つて居る而日ならず青年の佛教思想を考へますと純白なるもので、今日釋尊を迎へたる青年傳道會なるものは、此釋尊を中心として居る、之れには天台、禪宗等の種々の宗旨の信者がある、又種々の宗旨の坊さん、這入つて居ります、けれども佛教徒として考へますと、お釋迦様が中心であると云ふ

ことは、此純白なる性情の上から爾う決つて居るのである、コマシヤクレたる考から何う斯うと云ふ事が出来るが、子供のやうな純白な精神となつて考へますと佛教は釋尊中心と云ふ事が解るのであります、夫て日本の佛教界に活動して居る人々の距離は釋尊中心主義に纏らなければならぬと思ふ。

芽出度さ趨勢

現代の研究に就いて見ると、帝國大學の姉崎博士も、村上博士も、阿彌陀と云ひ、大日と云ふも是れ皆釋尊を渴仰し、その説法或は悟、或は力を慕つて其處に集つて發達して行つたのが佛教の正系であると云はれて居る、此は争はれぬ事であり、大學で研究して居るのは爾う云ふ態度を示して居る、又歐米の學問は之れは南方佛教から來て居るが、矢張り阿含を信仰して居る者と同じ、釋迦牟尼中心であります、佛陀を有難いと思ふのは無論釋尊を有難がるのである、其處で堂々たる學問の大勢は何うなつて居るかと云へば、裂せる宗派の研究に非ずして、釋尊の人格と主義と及び

より外に日本人を支配する適當の物はない、所が悲しいかな其佛教は幾十派に別れて敵國の如く争つて居るから、佛教を以て日本の國教とする譯には行かない、佛教徒が大に覺醒して其宗派の弊見を棄て、大合同を遂ぐるならば、之を以て日本の精神界を支配する所の國教とするが宜しいと云ふことを云ふたやうです、今日々本の思想界、精神界には種々の缺陷を生じ、一般の地方民政の上にも缺陷を生じて居る、教育界にも不徳義の者が現はれ、國會議員にも不徳義の者が現はれて、日本の道徳が頹廢したと云つて憂ひて居るのは憲法は出來たが精神を支配する完全なる宗教が無いからである、爾うぢやから國家を思ふ精神より考へても、佛教を思ふ精神から考へても、是非佛教の大合同をしなければならぬ。

釋尊を中心としての合同

併し熊公や八公の和睦の機に酒を一升豆腐を一丁買つた無意義の聯合では、却て佛教は死んで仕舞うのであります、之を遣るには其中心を最も確乎と立てなければ

その力を研究して進みつゝあるのである、其處へ此趨勢は到底一人や二人の力を以て遮ぎることは出來ないから、此趨勢に打委せて置けば、誠に芽出度い光景に移つて來ると信ずるのである。

日本佛教徒の責任

又更らに日本佛教徒の責任と云ふ事から考へると、いま日本の佛教徒は、日本の内輪に就いても大に覺醒して少なくとも日本の思想界を支配するまでに進まねばならぬ。之はスタインと云ふ學者が日本の爲に憂ひたのであるが、伊藤さんが憲法を調べられた時は、成程其憲法は最新の智識を集めて出來たものであるが、之は日本人の形體を支配する處の憲法で、もう一つ精神を支配するものがなければならぬ、夫はもと完全なる宗教がなければならぬのである、所が神道は日本在來の者であるが、之が將來の日本人を支配するだけの主義を持つて居らぬ、意義に於て大に缺けて居る、儒教が日本人には餘程用ひられて居るが、之も亦た宗教に必要な大事な問題が缺けて居る、其所で差詰り佛教

ばならぬ鳥合の徒となつて只だワイ／＼と云つたのみでは、熱烈なる信仰が持てぬから、爾う云ふ場合には眞の力は出ないので有り、其處で日本佛教徒が合同するに就ても、教理の細かい處から争へば八釜敷いが、先づ佛陀には釋尊を中心として各宗の人々が集つて釋尊を渴仰する態度に出たならば合同が容易いと思つて居ります、眞宗とか或は眞言とか云ふ宗旨が大きな宗門であるから、少し六かしい様であるが夫も考へ様で此等の宗旨も釋迦様を中心とせず出來たのではないから、一寸研究の態度を變へたならば髪の毛一筋で出來ると思つて居ります、非常に違つて居るものと思ふと違つて來るが、纏めると云ふにはお釋迦様は即阿彌陀の本體、大日の本體で有り、其から、日本の佛教徒が責任を果さんとするには、釋尊中心に集まる必要がある。

世界の大勢

又日本内地だけの宗旨でなく、少くとも亞細亞全體の宗旨と思つてやらなければならぬ、否最う一つの進んで

世界の佛教と思つて世界的宗旨の上に大に其責任を帯びねばならぬのであります。南方佛教と稱して居る錫蘭、暹羅の佛教、印度の佛教、支那日本の地方佛教とが接觸して、爾うして世界の佛教徒が同盟を造らなければならぬのである、過般回々教徒の人が來て亞細亞の同盟の事を齎らして來て居つたが斯の如く日本が世界から渴仰せらるゝ以上は錫蘭でも印度も日本を中心として集つて來る傾きがあると云ふことが察知せらるゝのであります回々教が亞細亞同盟の爲に北京に大學を建てると云ふ話がある、回々教の法王は盡力する爲に北京に來て居ると云ふことである斯の如く有様から考へても佛教の同盟は容易い、之をやるには先づ以て日本の佛教を纏める必要がある夫は南方佛教をも提げて起つ責任から考へなければならぬ、夫をするには釋尊を中心とせねばならぬ。

實の大乗の中には阿彌陀はないので有る、一切經の中にも有力なる所にはありませむ夫て日本が盟主にならうとするには、釋迦牟尼中心でなければならぬ、併し

方に諸佛を分立的に立つる主義と、其中に釋迦を中心とする主義と、斯う云ふ二つのものが別れて居ります、多くの場合に佛教徒の云つて居るのは、即ち三世十方の一切の佛に歸依し奉ると云ふとてあります、一心敬禮十方一切常住佛、法、僧と各宗の僧侶が云つて居る爾う云ふ場合には三世の時間に亘り十方の空間に満ちて有ると有らゆる佛を歸依すると云ふとてあります其澤山なる中に中心が有るか無いかと云ふ問題が起る、藥師如來、大日如來、阿彌陀佛と斯う分婁して居るが、この諸佛と釋尊との關係を解決するのが大事の問題であります。

時間中心の釋迦

小乗は時間中心の釋迦を取つたのである、過去の七佛と云ふとがある、又今の釋迦佛の後に彌勒菩薩が出て來る、されど現在には釋迦一佛しかないのである、其處には佛なしと云つて居る。

之は塵土の空論でなくして實際に其必要が迫つて居るのである、日本と英吉利の同盟は世界の平和を維持するが如く、二十世紀の思想界の指導は南北の佛教徒がやらなければならぬ機運に至つて居るのである、爾う云ふ點に於ても釋迦中心説は最も大事である。

現今佛教の各宗が種々の學校を建て、居るが、何れも完全に行かぬ、夫て各宗統一として大學を建てると云ふとは識者の間に唱へられて居る、而して其大學の講堂には何を安置するか、釋迦牟尼佛より外はないのである、誰彼の議論でなく時代が促しつゝある今日の機運である。

斯う云ふとは今日の有様であります、御經の上から考へ、歴史の上から考へ、又各宗主張の上から考へると、決して困難でないと思ふので有ります。

三世十方の諸佛

議論の順序として、佛教は小乗、權大乘、實大乘と別れて居りますが、其分別法から見たら何うであるか、問題は釋迦佛と諸佛との關係、諸佛主義と云ふ三世十度しない、我々を教ふて下さるのは釋迦牟尼佛である、彌勒菩薩が出世されるのは、夫れは何の位の後であるか、五十六億七千萬歳と云ふ後である、如何に氣の長い奴ても五十六億七千萬歳は侍てぬから釋迦牟尼佛に教はれなければならぬ、夫であるからして過去を説いても未來を説いても釋迦を中心として信ぜなければならぬ事になつて居る。

空間中心の釋迦

處が權大乘には十方に諸佛があると云つて東に善德佛西の方には阿彌陀佛があると云ふ様に説いて居ります併し乍ら此擴がつて居る十方の中に娑婆世界と云ふ我々が生れて居る處に二人の佛があるかと云へばそうは無い、と教へるのであります、本佛化境に二尊の變なしと云ふとがある、天に二日なく國に二王なしといふが如く、一人の佛が教化せらるゝ國土に二佛あつて争ふと云ふとはないと云ふのが佛教の原則であります、之のとは餘程入釜しく有らゆる大乘經に説いて居ります、其處で澤山なる佛があつても此世界に生れて居る

我々の爲には釋迦牟尼佛が救ふて下さると云ふのが權大乘經の説であります。

統一的本佛

實大乘の説になりますと絶体的中心の釋尊である、小乘に考へて居つた、過去の七佛未來の彌勒があると云ひし時間の諸佛を統一して三世に貫いて釋尊の働を見ても來るのであります、始めなく終りなき後まで實在し給ふ釋迦は久遠實成であると説いたのであります、又權大乘の説を纏めて廣い世界にも釋迦様の光明が何處の國までも及んで行くと云ふことを説いてあるて有りませす。

お月サンの光て酒を飲むのは、月の清き光を喜ぶのである、其場合に三千年前の此横濱已外の地を照したお月様を尋ね廻る必要はあります、又來年のお月様を尋ねる必要は有りませぬ、また横濱の人が松島の月がよいと云て之を思ふても現に照されなければ其興味と云ふ點に於ては全く駄目である、横濱に居る以上は横濱を照らす今夜の月を見なければならぬ、此月を掩ふ

た雲があれば松島の月も何所の月もなくするのである、「三笠の山に出てし月かも」と云ふ月は何うかと云ふことになりますと、月が澤山出て來ますが、横濱の月が横濱に居る人の感興を引いて宜いのであります、爾う云ふ意味をハッキリと説いて來たのが絶体的中心の釋尊であつて、茲に我々に教へて下さるお釋迦様が十方の至る處の佛様であります其絶体的佛様が現はれてこの世界に來給ふたのであります、小乘の時間中心も權大乘の空間中心も、實大乘で見る絶對中心に向ふ準備をなして居るのである。

諸經と釋迦中心

御經の事は、一切經は華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃、大体別けてあります、この一切經を達觀すれば何うなるかと云ふとはお釋迦様中心である、奈良に大佛が拵へてあるが姿を大きく拵へたからと云つて違つて居るのでは有りませぬ、矢張りお釋迦様であります、華嚴經を讀まねば佛様の富貴なるを解得する事が出來ぬ、釋尊が自分の働を詳しく説いたのが華嚴經で

ある」阿含は何うか、之れは天然に出て人間の前に適切な教を垂れ給ふた現實のお釋迦様で有る、これより外に佛様があるのではない、此も釋迦様に教はれなければならぬと云ふ精神を持つて居るのではある。

方等部、之れには種々の御經があるが、維摩經とか寶積經とか有らゆる方等部は皆な釋尊中心説であります、されば阿彌陀經や大日經は何うかと云へば、或宗派では非常に重きを置いて居りますが、其實重い御經ではないので有ります、丁度書籍箱の中に之は法律書、教育書、宗教書と一つ／＼分類して入れませす時、其中に雜書があるとす、之を棄てるわけには行きませぬから、雜書部に入れると同様であります、其中の物を取つて來て佛敎の眞意義とするから様々なる佛敎が出て來たのであります之は眞實のお話である、決して拙者が好い加減などを云ふのでは有りませぬ、一ツの宗派の辭見に因はれては有りませんや。

俗信なり迷信をり

般若經も又釋迦中心、法華涅槃は絶對の釋迦中心の眞

意義を教へたのである。方等部の中に一寸とした藥師經、地藏經、と云ふやうな澤山の經々が這入つて居りますけれども、極端に云へば、丁度日本の寺に帝釋天が祭つてある、六尺坊や道了があると云ふ工合、その宗旨本來の主張から起つて居るのではないやうなもので、眞言宗は大師を祭つて居るが夫が本尊かと云へば爾うては無いのと一般、又禪宗に秋葉三尺坊を祭るがそれが宗旨ではないお釋迦様の心を我々受繼いで行くのが佛心宗即ち釋尊の本旨であります、それと同一で一切經を達觀しますと、彌陀や大日の出て來るのは眞言宗の大師の俗信、禪宗の三尺坊の迷信と一般であることがよく分ります、そしてその反面には秩序整然として釋尊の威徳が顯はれ來るのであります。

釋尊と大醫者婆

茲に斯う云ふお話があります、着婆と云ふ名醫とお釋迦様と約束して、お前は名醫となつて肉體を救つて遣れ、私は精神を救つて遣ると云つて居られましたが、

夫は着婆は名醫でありますから何様な病でも直に治す
 スルト非常に有難く思つて、何をお禮と致しやう
 と云ふと、着婆は乃公は何も要らぬ、何處でも乃公に
 お禮をすると云つて困つて居る。乃公に禮がしたいと
 強つて云ふならばお前方は無病と思つて居るであらう
 が夫は肉體である、精神を見ると劇しい病に囚はれて
 居る、これは乃公の手では治らぬから釋迦様の許へ
 行つて治して貰ふが宜い、夫さへ足を運んで行つて呉
 れれば乃公の禮は宜しいと云はれた、其處で釋迦様
 の前に行つて信仰したので有りませす、舍利弗尊者とか
 文珠菩薩は皆な學者と思つて頭を低げて居るが、其學
 者と云ふ文珠菩薩や舍利弗尊者は釋迦様の處へ行く
 と頭を低げる、何様な豪い人でも釋迦様の前に出れ
 ば頭を低げる。

釋尊と觀音

觀音様のことに付ては昔門品と云ふものがあつて、觀
 音様に感心して瓔珞と云ふ物を頭上に載せて之で御禮
 をしやうとすると觀音様は夫は受くる譯には行かぬ、

世に生れたかと云ふ問題であります、之れは三部經に
 答辯がありませぬ、唯だお前が悪い子を生んだのは仕
 方がない早く阿彌陀様に救つて貰へと云ふことが書い
 てあります此婦人の尋ねた答へは何處に在るかと思へ
 れば他の經と連絡があることが知れる、夫には輕い問
 題と重大の問題がありますが韋提希自身のこととは輕い
 重大問題は釋尊のことが分らぬから他の經に依りて之
 を解決する様に出來て居ります、又三部經では舍利弗
 は佛になれぬと云ふ事になつて居りますが其處で之を
 研究すれば他の經と連絡する意義になるのであります
 夫で深く考察すれば淨土の經々でも釋尊を中心とする
 深意が寫されてあると云ふことが分るのであります。

唯だ一人格のみ

佛教歴史の上から云へば何うか、之れは俱舍宗、成實
 宗三、論宗、法相宗、華嚴宗、律宗と別つて居ります
 が、皆何れもお釋迦様である、天臺宗も禪宗もお釋迦
 様であります、問題は眞言宗と淨土宗であります、
 大日經を翻譯したものは大日如來とお釋迦様とは同一

お釋迦様に伺つて夫は受けても宜しいと云はれたなら
 ば受けるが、夫でなければ受けることは出來ないと云
 はれた、ソレカラ瓔珞を直に頭上に掛けらるゝかと思
 ふとお釋迦様の處へ持つて行つて頭を低げて之を奉る
 と云ふ有様である。

淨土の經々も釋尊中心

阿彌陀經は何うかと云ふと見方が悪いから分らぬ、三
 部經の中に韋提希と云ふ婦人がお釋迦様と話をする中
 に、妾は何んの因縁を以て斯う云ふ悪い子を産みまし
 たて御座いませう父は殺されて仕舞い、母は産敷牢に
 入られると云ふのは、何う云ふ譯でありませう、又貴
 方様は何故に提婆達多と云ふ様な悪人と親類になりま
 したか、轉輪聖王と云ふ王様には敵なしと云ふ事を聞
 いて居りまするが佛様は輪王より上の御方と思つて居
 ります然るに提婆達多と云ふ様な敵を持つて生されら
 れましたのが分りませぬと尋ねた、自分が悪い子供を
 産んだのは人間は罪もある因縁もあるから婦人合せて
 出來様が、何故に佛陀が提婆と云ふ様な敵を受けて現

体として居る心の闇を照らし給ふものであると云ふ
 から、お釋迦様の御力は日よりも大なりと云つて大日
 と稱歎したのであります、夫は近來學者の研究に依
 つて一層明になつて、來ました、大日を立て、釋尊を
 貶すれば非常の誤解である、又藥師如來と云ふとお釋
 迦様より他にあると思ふ人がありますがお釋迦様は着
 婆よりも名醫である、心の病をも治すと云ふから藥師
 如來となつたのであります、丁度日蓮上人に厄除の祖
 師、日切の祖師などと澤山の名があります、日本て
 は祖師は一つであつて未だその人格が分裂せぬから祖
 師と云ふとは一つの様に思ひますから宜しいか、病を
 治す佛は釋尊よりも他にありと思ふから、佛の人格が
 別にある様になつて來ますから非常に分裂の信仰が起
 るのであります、祖師の人格が一つと思へる様になれ
 ば決して佛様にも別佛と思ふことはないのであります
 爾ういふ非常なる僻見から來た誤解が多いのでありま
 す、眞言でも段々研究して參りますれば釋尊、大日一
 体と云ふことになるのであります、決して釋迦と大日と

別のものではない、釋尊の外に大日と云ふものはないと云ふことが明かになつて居ります。大日と云ふ佛がコノ世界の人を却て菩薩計に話をしたとすれば今の世界の人にも分らぬ筈、其物を以て人類の宗教とするとは出来ませぬ之は何うして傳つたかと云ふに猿が持つて来たと云ふことでありますが、夫は怪しいのであります。

不滅の釋尊

無量光佛不可思議光佛と云ふも八才の女が佛様に成つたときに釋尊にお禮を云つた言葉があります……讚美歌があります、深く罪福の相に達して遍く十方を照らし給ふと云はれた有難う御座いますと玉を持つて來て釋尊の光は遍く十方を照らし給ふ、コノ世界丈でなく十方界をお照らしなされると云つて居ります、又壽命の方から云へば壽命無數劫なりと云ふとがあります、釋尊の壽命を唯だの八十年と云ふ様な見方をするのは誤りであります大乘に移れば此釋尊の涅槃し給ふたのが消滅したものとするなら我々が死は無論消えて仕舞ふと云はなければならぬ、自分が實在不滅の安心立命が

來、無量光佛、大日如來等と別々の佛様があるうど。いま純白なる佛教徒が釋尊を中心として合同的に佛教公會堂を營む以上は、至心に釋尊を禮敬し、あらゆる力を盡して佛徳を讚歎せねばならぬ、釋尊に教はれ又其慈悲を尊敬するといふことは實に佛教徒の執るべき美事なる態度である。

現實と理想の調和 (一)

今日世界の思想界は何う云ふ有様かと云ふに、之を文學の上から研究して見ると、現實主義と理想主義とそれからこの二者を調和せるものとの三つに別れて居るが、有の儘の事實を執て深遠なる意義を没却したものと純粹の理想を執て空に唇氣樓を描くものとの二つはだめてある。されば現實と理想との調和せる完全なるものを取らねばならぬ、之を全理想と稱して居る。此に現實なるものを押へて、其中に含まれたる神秘を開發せねばならぬ。富士の山がある、清見瀉がある、それをたゞ寫眞に取つて來たのでは不可である、其妙景の神秘を發揮しなければならぬ。人情の美を捉へるの

出來ると云ふのは分らぬことになる、聖德太子が云はれたにはお釋迦様が消えて仕舞ふ様に思ふなら前等は佛教を信じて何になると云はれた其處色々に事が分れて居りましても、夫は皆なお釋迦様の純化に纏つて仕舞ふのであります

釋尊を解釋した佛

大方廣佛と稱へて、華嚴宗の如く佛陀の身軀の偉大なるを讚美するもあれば又眞宗の如く不可思議光如來などと佛陀の光明あ歎稱するものもあるが、光明ばかりの佛様もなく、身軀ばかり大きくても大男總身に智慧が廻りかねと云ふやうな野呆々な佛様があるべきものでない。其様な解釋はたゞ佛陀の威徳の一面を見たのであつて、恰も盲人の撫象に等しいものである、或は箒の如しと云ひ、或は塗桶の如くであると同張つても愚な話である。釋尊牟尼佛世尊は、大醫者遠以上の名醫、大藥師、よく衆生の心の病疾を治し給ふ。佛壽は長遠無量劫にして、徳は世界に光被する日輪よりも大なりと云ふことをよく分明ねばならぬ。何て大藥師如

もそうである、井戸端に於て溝共が喧嘩してをるのを寫實であると云つて描いた丈では不可である、其間に含まれたる人情の妙致を捉へなければならぬ。之を全理想と云つて現實と理想との二者を統合したものである。諸君が歌を作るにしても亦然りである、哲學では現象と本體とは別の物でないといふ事になつて居る、今日では其思想が盛に起つて來て居るのである。

理想と現實の調和 (二)

現はれたる現實の佛陀を棄て、大日があるとか藥師があるとかは、純理想派で現實とは没交渉になつて仕舞ふとして何が何だか薩の張も譯の分らぬ變なものになつて仕舞ふ。人格を慕ひ奉るに三十二相の美、智慧、慈悲、無邊の徳、皆現實の釋尊に現はれて居るされば本佛の顯現としての釋尊を見なければならぬ、夫を棄て、仕舞ふから不可である、そう云ふ誤解は駄目で、今日ではお廢止である、吾人は必ず此身より開發して無限絶對の佛身を成就せねばならぬ、又現在の不完全なる此社會を改良して進んで行くと云ふ思想を以て

居らねばならぬ、自己の外より佛を求むるのも此社會を捨て、他に求むるのも誤謬で、自己より開發し此社會を改良せなければならぬ、之れ決して一宗一派の私見ではない、現實と理想との調和は斯くの如く大切なことである。

結末

如上述べた如く、諸君は之から研究をなさるならば、釋尊の尊い事を研究せられ、阿彌陀様が釋尊の向を張ると云ふやうなことなく、何う云ふ風に調和するかと云ふ事に就て研究されたならば佛敎統一の目的を達する事が出来やうと思ふ(了)

常恒不斷の努力

(本化修養談の其二)

關田養叔 講演

中原道隆 筆記

本日は『常恒不斷の努力』といふとに就て御談し見やうと思ふのであります。私が本化修養談をやり出すのは、實は皆さんの前で演るのみでなく、自分に實際之を、つて見たいといふ考へなのであります。之を行ふとが出来得るか否か、甚だ實行し難い様に感じます。然し益々修養して行つたならば、遂には偉大なる日蓮上人の本化的行動に接觸する事が出来ると信じて居る次第であります。即ち『賢を見ては齊しからんとを思ふ』といふ様に、乍及、然様やつて見たいのである、私は、上人の御文を拜讀する度毎に胸に流ふとが澤山ある、其間にも折々上人の常の御精神は、或は斯様であつたらう、といふやうに種々考へますが、兎に角、其の日蓮上人の御精神たる活敎訓を實行して見たい、

何卒日々夜々に之を實行致したい、若し今日出来ないうならば是非明日、明日出来ないうならば明後日、今年出来ないうとは來年……といふ様に心懸けて、一步一步同上して行つたならば不知不識の中に本化聖祖の大人格に次第に親しみ、必らず自ら思ふて居る所を實現する事が出来るであらうと思ふて居るのであります。

『常恒不斷の努力』といふとは、人間は或る一の目的の爲めに、即ち學問の爲めであらうが其他何等の事業であらうが、此の爲めには平生不斷にイツモ變るとなく傳えず撓まず努め力めて怠らず進むべきものであるといふ意味であります。少くとも本化の法流に浴するものは常と其心を離れてはならない、全体、何事を成すにも一時的ではいけない、忽ちにして熱火の如くなつて起つたかと思へば、又忽ちにして直ちに氷の如く冷却するといふが如きは日蓮上人の取らざる所欲せざる所であります、上人の語に火の如く熱する信心は不可、水の如くして常に冷めざる信心でなければならぬと仰せられてあるが、信心ばかりではない苟も本化の大信仰

が基礎となつて、凡ての仕事をなす吾人に取りては、如何なる事業を爲すにも、水の如く淡として、而も息まざる努力がなければならぬ、小學讀本に、龜と兎と競走して遂に龜の勝利に歸したといふ喩がある、歩みの遅いのを自慢した兎は途中で晝寝をした爲めに遂に龜に負かされた、これは即ち凡ての勝利成功は皆不斷の努力に依るとを意味する喩でありませう、されば吾人は其不斷の努力といふ點に於ては、此龜的に恒に奮勉して正まざる様にしたい、此心を以て如何なる艱難辛苦に遭遇するとも屈するとなく、其目的に向つて努力して行かぬばならぬ、

凡そ此人世に於て學問でも、富を積むとでも、其他百般の事業が皆此の不斷の努力に依つて出来ないうものは無い、又古往今來の大人豪傑が成就したる、絶大の事業は皆この常恒不斷の努力の賜ものと斷言して差支な

終のもの、近きものと遠大なるものとがある、例へば諸君が勉強されつゝある上に於ても、近く申せば試験に好成绩を得たい爲めだとも云へませう、又親や師匠から學費を仰いで居るから之に背かない様に勉強せねばならないといふとも含んで居るだらう、或は自分は某々等よりも偉いものになつてやらうと云ふ様な目的もあらう、がこれ等は要するに小なる目的である、然し一面に於ては、斯かる勉強が他日法の爲め、社會人世の爲めといふ様な大なる目的と一致するに至るものである、而して、此大小の目的が區別ある様であるがその結論する最後の目的は唯一でなければならぬ、否必らず小なる近き目前の目的は、遂に大なる究竟の目的と一致すべきもので、若し一致しなければ斷じて本化的でない、されば商賣人が算盤をハジクにも帳簿を開くにも、單に個人的利益でなく國家の爲めといふ點に一致せねばならない、若し利己主義であつたならばその人一個人に取つては利益かも知れないが、然し國家公衆の上より觀する時は少しも利する所はない、否

のである、日蓮上人の學生の目的は妙法繁昌の平和の國を造り出すにあるので上人の如説修行抄に

『天下萬民諸衆一佛乘となりて妙法獨り繁昌せん時萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば吹風枝をならさず雨壤を碎かず代は義農の世となり今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得人法共に不老不死の理現はれん時を各々御覽ぜよ現世安穩の證文疑ひあるべからざるもの也』

と申されてあります、即ち世界萬民が妙法に皈した其時は國土は安穩、平和となり、歡天喜地を謳歌するに至ると申されたのである、而して此の平和安樂の世界を作り出すのが上人の目的で、又此の目的を實現する爲めには常恒不斷の努力を爲さねばならぬのである、諸君が本を讀むとか、ペンを執るとか、又毎日學校に通はるゝことも、或は商賣人が其業務に勵み、又軍人が其務めを怠らぬことも、最后其目的をいふならば日蓮上人の理想と決して矛盾を來すことはない、即ち富國強兵など云ふことも、畢竟は平和安樂の世界を實現

却りて損害を招く場合がある、曾て我邦の商人が茶を海外へ輸出して其の物價が大に騰貴した爲めにドシドシ送つた所が、我國の商業界に非常に不信用の結果を來した、それは輸出の多額と物價の騰貴とに乗じて不正品を敢て輸送した爲に斯様な不信用の結果を生じたのであつた、これ畢竟商業上の信用を無視し德義を顧みずして自己の懐のみ熾めんとする卑しき心より生じたのである、若し國家の光榮を保ち、商業の眞正を犯さないといふ、公の精神があり、正しき行爲をしたならば、斷じて這般の現象はないのである、又軍人に就て申せば彼等は毎日、右向け右……等とやつて居るが、彼等が毎日行つ居る單調な練習は、一朝事あるの時に際しては、假令泰山の崩壊し來るとも驚かず、雨霰も雪ならざる彈丸の飛び來る陣中にあつても怖れず、否益々勇を鼓して進撃し嚴寒烈暑をも事とせざるに至るので、即ち彼等の日々々の練兵は君國の爲め最も重要な兵力となつて、一國を防護するのみならず、進んでは世界永遠の平和をも保つべきものとなつて居る

する準備である、然らば此大理想大目的を發揮する爲めに吾人は毎日働いて居るので、是れが爲に不斷の努力があるのである、常恒不斷の努力とは日蓮上人の所謂不退の決定心であります、誰人も普通の時は心強く甚だ確固不拔の精神を有するやうに見ゆるがナカク此努力の精神を持續して行くことは頗る困難である、故に日蓮上人は此邊の消息を如説修行抄に洩らされてある、

『此經を聽聞し始めん日より思ひ定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと』

少くとも此法華經に信念を捧げて居るものは、三類の大難の來ることは必らず先づ覺悟して居らねばならぬと教へられたので、これは妙法繁昌の平和の世界を造り出す爲めに、不撓不屈にして而も常恒不斷の大努力を要すると教へられたる活教訓である、こゝに少し注意して置かねばならぬとは、此文に三類の大難、大小の難とあるからとて其文相に拘束されてはならぬ、聖祖は最後の大目的觀の上は大努力を調誡さ

れたのであるが、吾人本化の大信念に住するものは、日々の行事皆之れ法華經であつて、一行一事悉く如來事であるから、凡ての吾人の働きは皆最後の大目的に一致すべきもので、日々の行動、念々の作行の上に幾多艱難苦痛を踏破して大努力大勇猛心を縁ける所が即ち是れ三類の難を忍受するところとなるのである、元來流罪に逢はなければ法華經が身讀出來ない、寺を逐出されなければ修養が積めない、といふ様では斷じて本化的でない、時に處し、所に應じ、妙用自在なるべき本化の活佛教でない、即ち聖祖の所謂「此經を聽聞し始めん日より」て本化純粹の大法なる法華經の大信念に住したる其時より、學生が勉強する間にも、商人が算盤を執る時にも、農夫が鎌を手にする間にも、三類の難大小の難があり、又常恒不斷の大努力があるべきものである、それからして又開目抄に御自身の覺悟を示して

『王難等の出來の時は退轉すべくば一度に思ひ止むべしと且くやすらひし程に……今度強盛、善提心を

を遠い所に置かないで、近くこれを取り來りて我物とするならば、吾々本化教徒の成功の基礎となり、サクセスの鍵となるのである、此精神を以つて奮勉して行つたならば何事も出來ないといふことは斷じてない、若し此不退努力の大精神を有せず、行るが如く行らざるが如く、進むが如く進まざるが如く、愚圖々々して居るならば眞佛子でない、日蓮流の男兒でない、寧ろ生存の價値を認められざる遊民である、聖祖が畜盜法師と戒め、食味饑鬼と叱責せられたる嚴訓があるのは別事でない、常恒不斷の努力を奨励せられたのである、日蓮上人は、御妙判の中に「善提心を起すのは易いが終りを全ふずることは難し」と仰せられてある、又先きも申した如く、火の如き信心で一時に焔々と燃えて居つても直ちに消えてしまふ様ではならぬ、故に不變にして更らざること水の如き信心が肝要であると申されてあるが、信心といふからとて題目計り唱へ、經を讀誦ばかり、眞の信心でない、色讀心讀であるから日常平素の一行一事が皆信心と一如し、合体し之を

起し退轉せし願しぬ云々

と申されてあるが、實に日蓮上人は此度こそ強盛に法華經の主義を實現しなければならぬ、若し父母の難や師匠の難や國王の難等で、中途にて此修行を退轉し信心を破る位ならば、今の中に念ひ止つて此法華主義を全然捨てしまはう、が然し法華經主義を實現し世人最大の目的を成就しようと思ふならば、寶塔品を拜するに無量の迫害、無限の困難が來ることは今更驚くべきでない、否經を持ち此經の眞意義、眞目的を大千界に光顯するには「強盛の善提心を起して退轉せしと願し」有らゆる大難を冒して奮闘努力せねばならぬといふのである、強盛の善提心とは即ち是れ常恒不斷の努力である、勇猛精進の奮迅力である、「退轉せじと願しぬ」と仰せられたことも吾人日常の行動の上に轉じて深く痛切に味はねばならぬ、實は吾人は如何な事業に關係して居るあつても、毎日此の不退の心を持つて進まねばならぬ、

されば聖人の決定心、日常不退の大努力の精神は、これ不斷に實行し努力に現はし火の如き一時的でなく常恒不變、恰も水の滾々として盡きざるが如き冷々滾々として晝夜替らざるやうに進み行かねばならぬ、そうすれば必らず事業が成就する、成功の曉が見られる、一時に熱心にやつて成達げようと思つてもダメだ、漸を積んで大をなすの主義でなければならぬ、常恒不斷で平素途切らず努め勤むのでなければならぬ、此邊の消息を日蓮上人は、「水は寒積て氷となり雪は年を経て水晶となる様なもので少しづつ、のどが大なる結果を生み出し、悪は僅かなるも積れば地獄となり善は僅なれども積れば遂に佛となる」と申されてある、吾人は此誠を確守し、少しづつでも常恒不斷に向上するの精神を養ひ、倦まず怠らず努力勉強して行くの大決心を修得せねばならぬ假令、如何なる事業でも、之れを成就しよう成功致さうと云ふには、絶えず努力するといふ決心がなければならぬ、又豪傑と凡人との別る、所は此點である、學生などでも試験前に急に徹夜して勉強し、平素はノラクラして居るようでは不可、常恒平生冷々

淡々として勉勵努力して居ることが最後成功の秘訣である、昔話にあるが、辨慶と義經とて、飯粥をねつた、辨慶は力任せに一時に飯粒をねつて了はうとしたから却々ねれない、義經は力はないが、一粒づつ、休まずにねつたからよく飯粥が出来た、私は思ふに日蓮上人の事業成功の感念は一粒づつ、飯をねつて行、といふ行法と思ふ、それは上人の事業の上から觀察すれば、日蓮上人が法華經廣宣流布の大願を起して『南無妙蓮華經』と唱へたるは佛滅後二千二百二十有餘年が間日蓮一人であつた恰も須彌山の一座の如く大海の一滴の如くであつたが自ら大小無量の難を忍び折伏弘通した爲めに一人より十人に感化を及ぼし、十人より百人、百人より千人と次第に之を慕ひ信ずるものが多くなつて來た此の如くにして不退の勇猛精神に住し常恒不斷の努力を續けて行つたならば、日本國一切衆生のみならず一闍浮提の衆生を悉く日蓮の信仰に皈する様になる、此努力を押し通すならば、一天四海皆歸妙法の大事を成就し、廣宣流布は大地を的とする』と仰せられ、不斷

の努力に依て出來ないことはないとの確信であつたので單に一時的に熱狂して向ふ見ずに叫ばれたのでもなければ無闇に輕躁に荒れ廻つたのでもない、少くとも日蓮上人の門下たらんものは此確然とした面も不屈不撓の大精神大努力をば凡ての仕事の上に應用するの心得てなければならぬ、又上人が新地御書の中に『雪山の寒苦鳥は寒苦に責められて、夜明けなば栖つくらんと鳴くが夜が明け日が出れば朝日の暖かなるに眠り忘れ、一生空しく鳴く、吾等一切衆生も亦又此の如きものた』と仰せられてある、吾人は皆有爲の才を懷き「面モ懈怠アルコトナシ」と云ひ「所作佛事未タ曾テ暫クモ廢セズ」と説かれたる日夜常住不斷の努力をなし玉ふ所の大靈格たる、本佛の愛兒と生れながら、一時の逸樂に心を奪はれ、時に進み時に退き、一日温めて三日冷やし空しく雪山の寒苦鳥と爲つて一生を終る、實に感れな次第である、富木抄に

我門家は夜は眠りを斷ち晝は暇を止めて之れを案ぜよ一生空しく過して萬歳悔ゆること勿れ

筆記者曰く、本講演の前に同師の「本化的自覺自覺の精神」と云へるを提ぐる積りなりしが、本化修業の順序として、本講演を唱ぐるを適當と認められたれば、前項は次に説することにならぬ矣。

嗚呼九月十二日

惠 日 由 人

晩秋の月その影を惜むにあらざれども、今宵は何んとなう愁雲その光を隠すに似たり、湘南の海波常は玉白の光に映じて、峰巒その上に望み吾人をして恍惚たらしむる、七里ヶ濱の清境も奸邪無智の人に汚さるゝ、嗚呼九月十二日の夜……山雲愁ひ海神泣くも無理ならぬ、大事の目前に起りしことこそ、千古の痛恨である、否な思を潜めて考ふれば、思ひきや千古の痛恨は千古の光明として、偉人の活動靈徳を誇るべき名譽ならんとは、吾人は至誠を捧げてこの出來事を祝福するのである。

末法濁惡の世を救済せんとして、この國に出現せられたる聖祖日蓮は、正邪を判明しこれに因て、法悦の

と教へられてある、實に此大事の教訓を忘れてはならない、然し眠りを斷ち暇を止めと云ふからとて、飲食を喰はず毎晩眠らずに居れといふのではない、日蓮が門下たるものは、人生百般の事業は皆是れ最後の大目的に一致すべきものであるから、此信念確信の基に、常恒不斷の努力を續けよと申すのである、吾等が眠るのは多くは放逸懈怠より起るのである、一時の安樂を偷まんだめに睡むるのである、去りながら是れが一轉して不斷の努力を助くる爲めに寐ね大に働く爲に眠るならば、此睡眠や即ち是れ一種の努力である、大に勉め勵む爲めの休暇ならば、即ち之れ一種の勇猛精進で如來事である、されば只今の此聖訓は三毒強盛の我等對し懶惰の眠りを斷ち、放逸の暇を止めて常恒不斷に大努力を爲せよとの仰であるを拜すべきである、願くば諸君と共に此の『常恒不斷の努力』と云へる本化の大教訓を眷々服膺し、日常の事業に應用して、近くは忠實なる社會の良民となり、進んで本化の行者として永く譽れを願海に流したいのであります、

聖活を得せしめんがために、數々大難に遭遇せられ迫害の間を出入して、儼然救済の福音を傳へられた、仰げば彌々高く望めば彌々深き、本化偉人の靈徳……喬木は風に翹され、善人は悪人に邪魔せらる、花には風月には村雲、浮世とて謂ひながら、行るべき誠の道にそれて、闇より闇に赴く暗迷の人の多きを悲しけれ、教めれば教ゆるほど我慢邪慢増上慢の惡念こうじて、危害を加ふる人を本化の偉人は何んと思ふ、

あつから横しまに降る雨はあらじ
風こそ夜の窓はうつらめ

慈愛の至情益々流露して、身を殺して仁をなすべく本化の偉人は、迫害相かさなるにつけ、尊き貴き犠牲の靈光を輝かし給ふ、

我は如來の事を行ひ、我は如來の使なりとは、本化の偉人聖祖日蓮の自覺である、「日蓮だに此國に生れずんば、世尊は殆んど妄語の人たるべし」とは、聖祖日蓮が法華經を色讀して、法華經の眞理を體現せられたる靈威である、片海の關智坊は一字三禮の法華經を書

これである、されど凌辱飛迫彌々劇しくなるにつけ、偉人の靈徳正義の光明は益々眞價を現はすことになるは、久遠の眞理である、龍の口の法華は聖祖日蓮をして、その本地の靈境を告白せしめ、自己の使命の重且つ大なる責任と、遂行せしめたのである、尙聖祖の御文章に依て、當時の光景を窺へば、その活劇の實狀歴然として、今尙清新の生氣が包まれて居るのである、

「去る文永八年九月十二日御勸氣を蒙る、其の時御勸氣の様も常ならず法に過て見ゆ、了行が謀叛を起し大夫律師が世を亂さんとせしを召取られしにも過たり、平の左衛門の尉を大將として數百人の兵者どう丸著せて、えぼうしかけ、眼を瞶し聲をあらゝかにす、大體事の心を案するに、太政入道の臣ながら世を取り國を破らんとせしにも似たり、只事ども見えず、日蓮是を見て思ふ様、日來月來思ひ儲けたりつる事是也、幸なる哉法華經のために身を捨ん事よ、臭し頭を削られたらば、沙に金を替へ石に玉を商へるが如し」と

寫し、一日二部の法華經を讀誦するも、唯口に讀むのみにあらず、法華經の義理に遠ざかる似而非者なり、かゝる亡びたる信仰者の最後こそ、哀なりとは聖祖日蓮の弟子檀那に教訓せらるる所である、活ける信仰の力は法華經色讀によりて、體現感應あることを聖祖日蓮の門下は、永久に肥體すべきである、これある故、數々迫害を蒙る聖祖日蓮は、一難また一難の加ふる毎に靈光輝き、正義のために奮闘して我身經文に符合することを、釋迦牟尼世尊に感謝せられたのである、

聖祖日蓮化導三十年その間における、大難四ヶ度小難その數知れず、而して文永八年九月十二日に於ける龍の口の法難は、偉人の本領と面目を躍如たらしめた、正義の權威は何人も侵害すること能はず、爲政者が不正なる暴威を振ひ、凌辱を加へんとするも、正義の權威は毫もその威威を損せず、反りて尊高の靈力を増すのである、愚なる北條氏は此に心付ずして、聖祖日蓮に對し、狂暴なる壓迫を屢々加へ、更に當時の法制を無視して、死罪を斷行せんとす、龍の口の法難は既に

嗚呼何たる確信ぞや、さらに無法狼藉をさしはひる兵者に對し、大高聲を放ちて申さる、様「あら面白や平の左衛門の尉が物に狂ふを見よ、殿原只今日本の柱を倒すなり」との叫びは、如何に危難に處して泰然不動の偉作を現前せられたるかを知るに足る、刑場に赴く途次、四條頼基の邸宅は程遠からずとて供にたてる、熊王丸をして頼基を呼寄せ、教訓を加へられたるが、その信徒に對する温情と至誠は、遺憾なく聖祖日蓮の本領面目は此にも活躍として現はれて居る、

「この數年が間願つる事これなり、この娑婆世界にして、雉となりし時は鷹のかかれ、鼠となりし時は猫にくらわれき、或は妻に子にかたきに身を失ひし事、大地微塵より多し、法華經の御ためには一度だも失ふ事なし、されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養心にたらず國の恩を報ずべき力なし、今度願を法華經に奉りて、其功徳を父母に回向せん其あまりは弟子檀那等に配當べしと申せし事これなり」と、

さらに左の御文章を拜讀すれば、龍の口法麩の光景は皎として、目前に視るが如く思はる、

「左衛門の尉兄弟四人馬の口にとりつきて、腰越龍の口に行ぬ、此にてぞ有んすらんと思ふ所に、案にたがはず兵士ども打廻りさわきしかば、左衛門の尉申すやう只今なりと泣く、日蓮申すやう不覺の殿原かな、これほどの悦びをば笑かし、いかに約束をばたがへらるゝぞと申せし時、江の島の方より月のごとき光りたる物まりのやうにて。辰巳の方より戌亥のかたへ光りわたる、十二日の夜のあけぐれ人の面もみへざりしが、物の光り月夜のやうにて人々の面もみな見ゆ、太刀取目くらみ倒れ臥し兵士共おち怖れ興醒て一町計り馳のさ、或は馬よりをりてかしまり或は馬の上にてうづくまれるもあり、日蓮申すやう如何に殿原、斯る大禍なる召人には遠ふのくぞ近く打よれやうち寄れやと、たかだかと呼ばわれども急ぎよる人もなし、さて夜明ばいかにいかに、頸切べくはいそぎ切るべし、夜明なば見苦しかりなん

と勸しかども、とかくの返事もなし、はるか計りありて云く、相模の依智と申す所へ入せ給へと申す」當時鎌倉武士の中の武士と誦はれし頼基は、只今なりと泣く、この頼基の涙に物の情を知る日本武士の精神がこもり居るのである、不覺の殿原かなこれほどの悦びを笑へかしたとは、何んたる生氣ぞや、聖祖日蓮の熱烈なる至誠は天地法界を動すべく、偉大なる活力を有して居る、この偉大なる活力は龍の口に於て靈現されたのである、日蓮灌漑に當れば、教主釋尊衣を以てこれを覆ひ給はんか、去る年九月十二日の夜中には虎口を脱れたるか、必らず心の固によりて神の守り即ち強とはこれなり」とは、聖祖日蓮が法華經を色讀し本佛の實在に對し、忠實に確信を活現靈用されたかを認め得らるゝであらう、

嘱目篇

り、今や現代の人士物質界の力に心酔して、精神界の力を認めず、空しく肉體に束縛せらるゝの哀れなる、蓋し物質の進歩は人なり、されば精神の靈力がすべての主動力であることを認得せよ、偉大なる聖祖日蓮の性は六百年を過ぎて、尙ほ新なり願くばこの活ける偉人の人格に同化せられんことを、吾人は正義のために、人生のために、國家のために祈るのである、

當世日本國に第一に當める者は日蓮なるべし、
命は法華經にたてまつり名をば後代に留むべし
(開目抄)

△出版界の罪惡、出版事業は公益的である、然るに誇張的廣告を利用して、篤學者を欺騙するは恕すべからざる罪惡である、書肆は素より營利的本位なれどそれすら、この詐偽的行為を敢てするに於ては、彼れ奸商の業るべき、信用上の損害は到底創傷を醫するの道ないことになる、宗教家文學者などが、この詐偽的廣告を利用して、私腹を肥すの材料にする者を予は、性々目撃するが、斯かる羊頭をかかげて肉を賣る弊風と、書肆が商法上の掛引より實物に副はない、突飛なる賣價を附すことは、篤學者のために除去したい

△支那を毒するものは阿片である、日本を毒するものは迷信である、一は肉體上より精神を沮喪し、一は精神より肉體に害毒を残す、然れどもその病毒は非常は徑庭あるが如く見ゆれども、その餘毒と苦痛を受くるは同一である、迷信系の淫祠などの既患は、

國家のために一日も早く除きたい、これ我等同志の至願である、この至願は日蓮上人の至願を繼承したのである、御覽なさい迷信系の信仰に浸染してある、人の面貌動作の狂的なるを、予は何時も總武線にて上總へ往復するたびに、中山驛にて、昇降する人を見てこの感想が常に浮ぶのである、

△寺院を活かしめよ、時と所、人と法、これ等をして靈あらしめ、これ等をして活かしむる妙談は、法華經に於て、説示する所であるが、今日の寺院は死人同様の境的である、靈的活動を採る所を名けて寺院といひ、これを精舎と名づけ又道場といふ、宏壯なる多數の寺院をして、その體その用を實現せしめよ、寺院を活かしめよとは、人法共に活躍するを意味することを、忘れてはならない、

△人文の發達に伴ふて、理想郷は現實すると思ふ、寂光の理想郷は我等法華經信仰者の目的地である、人文の發達に伴ふて、現實する理想郷は我等の棲息する現實の世界を指すのである、箇人的自治の觀念は

た又寺院當事者の怠慢か、巷間左の如き説をなすものがある、

墓地市營の計畫 東京市は去る三十六年告示四十五號を以て同年より向ふ五ヶ年内に市内墓地の改革を爲すべき旨を指示し寺院の數一千百三十五ヶ處に上りたるも移々しく移轉せざるを以て移轉期日を四十四年三月迄延期せしが現今の形勢に徴すれば到底該期日迄に全部移轉すること覺束なく且つ本問題に付ては種々の弊風行はれ今日迄移轉せし數僅々四分一位に過ぎざれば期日の終了を待つて移轉未了の寺院を悉く市費を以て同一場所に移轉せしめん計畫を立て目下準備中なりと云ふ

△予を以て見れば、早晚この強制的方法に出づるの止むなきは、當然の事と思ふ、然れども此に一言すべきは、寺院も一日の搖安に馴れず大局を遂に達観して遂行すべきは勿論なるも、官廳側に於ても繁文縟禮の弊や、面倒なる取扱手續に空しく日を費さず、簡易を専らとして、處理せんことを望むのである、

進んで、結合的自治の機關を構成し圓滿に運用することになる、自治機關の良否如何は、人文發達の程度を知るの試金石である、

△各教團の獨立せる所以は、立教開宗の歴史の證明に基くことは、必然の要件であらう、殊は小教團の獨立は其教團の主義を尊重せられて、存在するものたることは謂ふまでもないが、獨立に伴ふて自治機關の完備せず、糊塗的手段を執るもの又少しとせず、斯の如き教團は小我を捨て、同一教祖を戴く教團に聯合若しくは合併するを得策と思ふのである、

△墳墓は我家の靈域なりとは、知人の言葉である、先祖累代の墳墓を發掘して、他處へ移すは情に於て忍ぶ能はざるべけれども、また四圍の事情に驅られて、移轉改葬を餘儀なくせしめらるゝ、また止むを得ざることも、予は知人に同情を寄するのである、東京市墓地改革問題は、目下現實の問題である、去る明治三十六年四月已來、この問題の實行せられしにも拘らず運々として、運ばざるは、官廳の曠職が將

地目變換や其他の問題に對し、殆んど壹年否なその以上も放任されては、當事者の受くる金銭上の損害は素より、其他の不便困難は甚しいことは、予の諸方に於て見聞する所である、

△この墓地問題に就て、尤も興味あり試験すべき問題の生れたことを、予の悦ぶべき所である、抑も寺院とは如何なるものか、これ前段に述べたる所であるが、迷蒙なる僧侶の頭腦に今更ながら、この感想が浮び研究心の起りたるを、予が悦ぶ所以である、墓地を離れて寺院の存在をあやぶむ僧侶の多きは争ふべからざる事實である、この懸念も一性は無理がない、東京市の人士は、教義信仰を念頭に措かず、寺院に詣るのは墓參が主意である、そこで、墓番僧侶割割坊主が出来ることになる、平生信仰扶植に努めて居る僧侶は、寺院墓地の分離問題が起りても動かない、何んとなれば、斯かる事はドーなりても痛くもなければ痒くもない、天の配劑といふか佛天の加被力といはうか、この墓地移轉のために寺院をし

て活かしむることになりた。各教團高材逸足の士、彼等僧侶を活かしめ、而して寺院をして靈的活動の道場たる所以を實にせよ。(篋堂)

若し道なき世を憂ふるの心なくんば、斯くて佛衣を着るこそ勿れ、佛飯を食むこと勿れ、盡しく僧徒に生ずるは佛子唯一の勸導なり、罪科なり、

本多大僧正訓誡の一節

報 道

尚風會主催の夏期講習會

(稀に見るの盛會)

豫て報導せる如く尚風會夏季講習會は去る一日より山武郡東金町西福寺に開會せるが同日「初等農業教育に就て」本縣技師農學士河原丑輔氏、「獨立自治(上)」早稻田大學教授文學士藤井健治郎氏、「自治講話」幻燈使用(自治協會々長長澤則彦氏、同二日「獨立自治(下)」藤井文學士「勞働」法學博士矢作榮藏氏、「名利は貴ぶべきか」茂原農學校校長農學士加藤忠治氏、同三日「貯蓄」

矢作法學博士、「人道より觀たる監獄問題」家庭學校長留岡幸助氏、同四日「永劫大體の我」佐倉中學校校長山内佐太郎氏「推讓」留岡幸助氏、衛生辨安「醫學博士三宅秀氏」教育の三大要件「山内佐倉中學校長」矯風獎善の事業(上)「内務書記官中川望氏、同五日「矯風獎善の事業(下)」中川書記官「講習員に告ぐ」有吉知事「地方財政」日の續、「宗教と教育」文學博士姉崎正治氏、同七日は姉崎博士、本多大僧正、野口僧正、加納子爵等の講演ありき因に講習生の重なる者は小學教員、町村吏員及學生實業家等にして遠近より會する者二百六十名の多きに達し近來稀に見るの盛舉なりし

尚風會大綱支部發會式

尚風會大綱支部發會式は去る五日山武郡大綱町運照寺に於て舉行されたり當日有吉本縣知事には前項記載の如く東金町に開會中の講習會に臨み一場の演説を試みられたる後更に此發會式に臨場されたるが知事には歸應時間の都合上舉式に先ち簡單なる演説を爲し聽衆を感動せしめしものあり夫れより岩佐幹事開會の趣旨を述べたる後唱歌「君が代」合唱に次いで大綱町長松山一茂

氏の「戊申詔書捧讀」大綱高等小學校長石井恒清氏の「祀詞朗讀」ありて式を終へ直ちに講演に移り

- 第一席「天祐」騎兵大佐山本米太郎氏、第二席「小作人保護に就て」法學博士桑田熊藏氏、第三席「政治的教育」關和知氏、第四席「人生」大原祥一氏、第五席「時代の思潮」代議士藤代市之輔氏、第六席「文中子」法學博士鶴澤總明氏、第七席「行ふこと難し」僧正野口日主氏、第八席「天地位而萬物育」醫學士千葉彌治馬氏等

にして各講師の熱心なる演説は一千五百の聽衆をして終始靜肅に傾聴せしめたりしは大なる成功といふべきなり因に當日は大綱町の有志者青年會員親友會員等總出にて諸事幹旋を爲し殊に同町の醫師板倉佳藏、青橋旬一、森田廣之助の三氏は救護所を設けて會衆の衛生に注意されたる等萬端用意行届さしは感ずべきとなり

東京顯本協會記事

八月八日淺草清島町常林寺に於て開催

- 人 性 熊井本光師
- 日蓮上人の信仰 石川顯隆師
- 人心發露の機 笹川眞照師

本尊の實像

關田養叔師 山根日東師

統一主義とは何ぞや

各辯士何れも熱心に説示せられた、特に妙論の辯人が三々伍々、何れもノートを手にして要領を筆記なし居るを見受けた、

八月十二日品川町妙國寺に於て開催

信仰の要諦 實業の一等 佛敎とは何ぞや 宗教的意識に就て

石川顯隆師 笹川眞照師 山根日東師 本多日生師

本日は各辯士の演説に對し聽衆語に燈を得たりとて、非常の悦なりし、山田豊次郎君は笹川師降壇后、自己の領解を述べられた、本多大僧正の演説は實に太陽の衆星の光を奪ふが如く、論理剴切明快なる説明には聽衆の心醉はこれこれを云ふてろうと僕は思ふた、八月十五日は谷中本授寺に於て開催

無價の寶

石川顯隆師 關田養叔師

この日も聽衆は熱心に辯士の説明を傾聴したが或る一人のいへるには、從來信仰の事を聞かんとするも、その機會なく常に遺憾と思ふたに、毎月常例に斯様に結構な會に參られるのは、此上ない満足であると遠懷談

があつた、

八月廿七日は品川町妙蓮寺に於て開催

- 偉人と正義 中原道隆師
- 佛教の本領 高山俊貞師
- 日蓮上人の嚴訓 關田英叔師
- 如來の室 石川顯隆師
- 人中の寶 佐川眞應師

本會は炎暑の折りとて、納涼旁た夜間の催でありたが關田上人が、遠來の所を事ともせず出演せられ、聽者に深大の印象を與へられた、淺尾清造君が各宗の教義無能なる僧侶、無慚なる信者に對し、ワカラン節にて痛棒を加へられたは、これを棒腹絶倒とも申すべし、か、何れも笑ひのために又痛棒のために、腹をぐぐられし心地せられたり、

八月廿九日は淺草田甫慶印寺に於て開催

- 慈悲と法華 武田顯隆師
- 一切衆生の依止處 山根日東師
- 活現の意義 佐川眞應師
- 活ける佛敎 關田英叔師

山根師が意氣軒昂高調に談論せらるゝ時、一天俄にかき曇り轟雷ささまじく、その音響演説に和するの一奇觀を呈し、而して聽衆泰然自若として信念の不動を示

日蓮を透して舞ける法華經

天晴地明の意義

七月二十日午後八時半

佛敎の人権論

法華信仰の靈力

八月二十一日午後八時半

日蓮上人の人格の一斑

本佛の慈應

山名木信師 能仁事一師

原田啓廣師 能仁事一師

松崎孝成師 能仁事一師

每會聽衆二百餘名各辯士の熱烈なる演説に感動し多大の法益を得たる如く見受けられたり

○日蓮研究會 五月以降八月に至る迄相變らず毎月第一及第三の土曜日本行寺客殿に於て開催し講師能仁事一師の聖語録本尊篇及行法篇の講義あり終に會員の討論會を開き提出せられたる論題に付き甲論乙駁口角沫を飛ばして論議するの間に互に修養に利益するものあり特に客月二回に渉る『不受不施一派の主張せる肉食妻帯の可否』と題せるせの一般日蓮宗信者の注意を引き每會々衆百餘名なるに比し二百餘名の聽衆あり中には不受不施の熱心なる信徒ありて否説を主張し各自大に意見を闘はし起立の結果終に可説の勝利に歸し同會も會を重ねる毎に益盛大に赴きつゝあり、七月末相州鎌倉に於て開催せられたる天晴會講習會へ同會より

せり、笹川師登壇に方たり、森川秀光師は聽衆に對し暫らく休憩すべきか、否やを匡したるに遠慮無用早く妙談を拜聽致したしと、以て本會の演説が如何に世人に印象せらるゝかを卜知するに足る、吁熱誠は人を同化せしむ力あり、各自その天職を自覺して奮勵せられよ本會が去る四月設立してより、精神界に偉大の勢力ある効果を奏せり、而して關田笹川の兩師はその先鋒たり、山根師は殿軍たり、石川吉田中原熊井の諸師は中軍の麾下たり、各勇士は今後奮闘を持續せらるべし、尙ほ隠れたる志士もこの風を望見して、中軍に参加し將帥の節度に従ふべきに到らん、

○關山教信 何山市山崎町本行寺住職能仁僧正は炎暑にも拘らず鋭意弘法に勉め居らるゝが其近況左に通信致候

○篤信會 當山顯本法華宗信者より組織せる同會は毎月一回山崎町本行寺客殿に於て公開佛教演説會を開催せるが五月以降出席辯士及演説左の如し

五月二十七日午後八時

日蓮上人の特長

信條の根據を明確にせよ

六月二十八日午後八時半

高田日暢師 能仁事一師

松崎事成中川事顯兩氏を特派したる由

○關山顯本法華宗婦人會 五月より八月に至る迄毎月十五日本行寺客殿に於て開催法要の後各會員の祖判朝讀能仁會長の法話あり每會々衆百餘名あり

其他能仁事一師は六月以來兒島郡味野町に於て松山郡長及南松學校長町長等の組織せる土曜會及御津郡志方尋常高等小學校々友會、上道郡金田尋常小學校、御津郡建部高等小學校等の招聘に應じ講演致され苦熱と戦ひ東奔西走正義の光顯に奮勵せられつゝあり

京都通信

○七月二日午後八時より五條假上行寺例會

- 佛陀の慈悲 銀井乾升
- 修養論 川崎英照
- 戀佛愛法 鈴木孝碩

○七月十五日五辻壽量寺例會

- 法華經より觀たる帝王の發心 鈴木孝碩
- 四法を成就すべし 川崎英照

○七月十八日日本山例會

- 開會の辭 森義觀
- 宗教と道徳 銀井乾升

苦痛なき生活

月愛の光(其一)

○八月二日五條上行寺例會

理想的宗教

慰安の生活

法華經の真意義

各辯士の熱心に依りて到る處盛會なりき八月よりは久遠寺上行寺に於て二回づつ開會の由

○大阪大火と本山 七月卅一日より八月一日に到る大阪北區の大火は實に近年稀なる被害にして其悲惨の情

報新聞紙に現るゝや各地同情の聲高く慰問救護に盡す者多かりし中に、我本山妙滿寺にては、野口僧正は宗務廳及本山を代表して、田上寛靜、銀井乾升師と共に

三日實況を視察し府廳、市役所、被害者救護所、達成寺、堂開寺等の末寺を慰問し、歸りて直ちに四日本山に於て救濟演說會を催し五日には鈴木孝碩、川崎英照の二師、第二回慰問弁に視察として、日蓮宗の僧侶にして多年京都に子守學校夜學校等を經營せられつゝある中村寛澄師と共に出張したしく慰問視察を遂げ、

七日は高辻久遠寺に於て、六日は寂光寺内子守學校に於て、九日は五條上行寺に於て、視察報告救濟演說を

川崎 英照
鈴木 孝碩

川崎 英照
鈴木 孝碩

銀井 乾升

なしたり、尙本山は勿論、本山婦人會員は東西に奔走して會員を募集し大阪朝日新聞社に托して被害地に送附したり

○聖祖門下同志會の發展 京都日蓮宗各派に依て組織せられたる同會は本年一月以來毎月一回例會を開き各派聯合提携の必要を認め時代の風潮に倣れざらん事を期しつゝあるが、今回更に研究部を興して權實門を始めとして末は基督、天理、墨住、金光等に到る迄各自手を配ちて精細なる研究評論を爲す事に決し本月より之を實行し本月は川崎英照師は淨土宗に就て中村寛澄師は基督教に就て所見を述べよし、因に京都各派本山は交渉の上研究上必要なる書籍等を閲覧せしむる便宜を興へつゝありと

○第二教區前期巡回布教會執行せられたる其場所演題左に七月十五日生實本滿寺開會聽者參拾餘名なりし

開會の詳

國家的宗教

宗教と道徳

未定

竹内 無著
今井 日吉
井口 善叔
中村 乾信

七月十六日查邊田妙本寺開會の日割なりしが住職より堂宇修繕未了の故を以て急遽變更し八幡町圓頓寺に夜

處なるが同會は宗義の闡揚信仰の鼓吹未だ以て足れりとなさず同縣下各教區に巡回大講演會を開くべく決

議し各布教師は熱誠以て講演せられつゝありと今其の開演の場所及演題を得たれば茲に掲ぐる事となしぬ

六月十九日第二教區演野本行寺開會當日は大雷雨ありしに關らず聽者五十餘名寺院としては梅澤、齋藤、小池、鶴澤、山形、大塚、竹内、の各住職も出席せるを見る

開會の詳

法華經主義

衆生の恩

宗教問題の正路

佛道と人道

日本人の性質

大聖日蓮と四條金吾

宗教の本義

濟澄山の願

宗教と家庭

伊藤 實樹

今井 日吉

井口 善叔

中村 乾信

小竹 俊雄

夏目 智吾

秋葉 日成

廣部 乾山

龜崎 日憲

森川 寛行

今井 日吉

井口 善叔

伊藤 實樹

七月四日第三教區眞名本源寺開會當日亦大風雨行路甚だ困憊を極めたりしも教區行事は勿論寺院及び住職の周到なる用意は遺憾なく其の効果を顯し小學校生徒を除き、ノ宮郷十數ヶ村の熱心者無慮百餘名來集せり住職としては井上管事を始め木村、石橋、大川、大津、三、

苦痛なき生活

月愛の光(其一)

○八月二日五條上行寺例會

理想的宗教

慰安の生活

法華經の真意義

各辯士の熱心に依りて到る處盛會なりき八月よりは久遠寺上行寺に於て二回づつ開會の由

○大阪大火と本山 七月卅一日より八月一日に到る大阪北區の大火は實に近年稀なる被害にして其悲惨の情

報新聞紙に現るゝや各地同情の聲高く慰問救護に盡す者多かりし中に、我本山妙滿寺にては、野口僧正は宗務廳及本山を代表して、田上寛靜、銀井乾升師と共に

三日實況を視察し府廳、市役所、被害者救護所、達成寺、堂開寺等の末寺を慰問し、歸りて直ちに四日本山に於て救濟演說會を催し五日には鈴木孝碩、川崎英照の二師、第二回慰問弁に視察として、日蓮宗の僧侶にして多年京都に子守學校夜學校等を經營せられつゝある中村寛澄師と共に出張したしく慰問視察を遂げ、

七日は高辻久遠寺に於て、六日は寂光寺内子守學校に於て、九日は五條上行寺に於て、視察報告救濟演說を

川崎 英照
鈴木 孝碩

川崎 英照
鈴木 孝碩

銀井 乾升

なしたり、尙本山は勿論、本山婦人會員は東西に奔走して會員を募集し大阪朝日新聞社に托して被害地に送附したり

○聖祖門下同志會の發展 京都日蓮宗各派に依て組織せられたる同會は本年一月以來毎月一回例會を開き各派聯合提携の必要を認め時代の風潮に倣れざらん事を期しつゝあるが、今回更に研究部を興して權實門を始めとして末は基督、天理、墨住、金光等に到る迄各自手を配ちて精細なる研究評論を爲す事に決し本月より之を實行し本月は川崎英照師は淨土宗に就て中村寛澄師は基督教に就て所見を述べよし、因に京都各派本山は交渉の上研究上必要なる書籍等を閲覧せしむる便宜を興へつゝありと

○第二教區前期巡回布教會執行せられたる其場所演題左に七月十五日生實本滿寺開會聽者參拾餘名なりし

開會の詳

國家的宗教

宗教と道徳

未定

竹内 無著
今井 日吉
井口 善叔
中村 乾信

七月十六日查邊田妙本寺開會の日割なりしが住職より堂宇修繕未了の故を以て急遽變更し八幡町圓頓寺に夜

處なるが同會は宗義の闡揚信仰の鼓吹未だ以て足れりとなさず同縣下各教區に巡回大講演會を開くべく決

議し各布教師は熱誠以て講演せられつゝありと今其の開演の場所及演題を得たれば茲に掲ぐる事となしぬ

六月十九日第二教區演野本行寺開會當日は大雷雨ありしに關らず聽者五十餘名寺院としては梅澤、齋藤、小池、鶴澤、山形、大塚、竹内、の各住職も出席せるを見る

開會の詳

法華經主義

衆生の恩

宗教問題の正路

佛道と人道

日本人の性質

大聖日蓮と四條金吾

宗教の本義

濟澄山の願

宗教と家庭

伊藤 實樹

今井 日吉

井口 善叔

中村 乾信

小竹 俊雄

夏目 智吾

秋葉 日成

廣部 乾山

龜崎 日憲

森川 寛行

今井 日吉

井口 善叔

伊藤 實樹

七月四日第三教區眞名本源寺開會當日亦大風雨行路甚だ困憊を極めたりしも教區行事は勿論寺院及び住職の周到なる用意は遺憾なく其の効果を顯し小學校生徒を除き、ノ宮郷十數ヶ村の熱心者無慮百餘名來集せり住職としては井上管事を始め木村、石橋、大川、大津、三、

幻燈開會せり聽集貳百餘名今井竹中村の各師熱誠説

明の勞を執られ多大の效果ありしを認む

七月十七日神崎眞淨寺開會の都合なりしが同寺は貧小の一寺院なるに隣區萩作に眞言宗本山滿光院のあるありて信徒にして眞言化する者あるを慨し住職竹内及總代協議の決果萩作區の富豪にして有志家なる積田登氏新築の大邸宅に開會せり同區は即ち眞言萬光院の所在地に加ふるに大部分は眞言徒なる其の敵地に侵入戦とも見るべきなるに萬光院住職も參聽せる事として各講師の意氣天を衝く者の如く聽集亦た四隣の有力者二百餘名何時法戦の開始せらるやを注視せらるゝ者の如し近來纏て見ざる會心の講演にして亦た極めて効果の甚大なりしを認む家主積田氏の接待振り縣下に多く求むべきなし敵地に此の信仰家にして實力者の現立するは宗門の爲め深く慶すべき事ともなり

開會の詳

竹内 無著

今井 日吉

井口 善叔

中村 乾信

國家的宗教

宗教と人生

余が救濟観

○千葉縣聯合布教師會講演 同聯合會組織以來日淺しと雖も其の效果稍や睹るべき者あるは既に認知せらる

須、白鳥、大塚、稻子、前田、吉富、國府、古口、水野、宇津木の諸氏なり

開會の趣意
法華に世法を得るか
清澄山の福
人生の行路
龍口法蓮
是眞佛子
宗教と勇氣
人生終局の目的
活動的宗教
信心の力
亦隨力演説としては

八月八日第四教區本帆町蓮福寺開會管事神田日兆當番布教師成島の兩氏及白鳥執事等の盡力にて大暑焼くが如き炎熱も苦とせず會する者七十餘名大津、倉上、鈴木古口の諸氏來會せるを見る

秋葉	日度	伊藤	實樹	森川	會慶	小竹	俊雄	夏目	智香	森川	寛行	成島	泰行	井口	善叔	井口	日省	龜崎	日靈	大津	賢淳	木村	乾中
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

清澄山の曙
觀心本尊抄の一節
道徳の權威
人生のサーチライト
涼味
忘る、勿れ吾身

○千葉縣千葉郡濱野村七里法華根本靈場本行寺中に邊般開館せられし圖書縱覽所に對し全中村所長の圖書寄附廣告に賛成し寄贈せらるゝ特志家極めて多き由なるが全縱覽所の爲め縣下の爲め慶すべき事と云ふべし
○備前和氣本成寺檀徒の美譽 全寺住職原田客廣師は大坂の大火災に對し、罹災民に多大の同情を表し、救助のために金品を募集せられたるが、全寺の檀徒何れもこの舉に贊助し、原田師をして素志を遂げしめたり依て原田師は醜金を大阪市長宛送られたる由、天下の悦を以て悦び天下の憂を以て憂とし、これを事實に表現するは、志士仁人の行爲なり、本成寺々檀のこの舉は本宗々徒の面目を發揮したるものいづべし
○國友日斌師の理想集團 佛教に於ける僧伽の制度を骨子とし、これに基督教々會制度、救世軍活動の方式、淨土眞宗傳道の狀態等を參考として、國友師は今回理想の集團を完成せられんとす、願ふに異體同心の祖訓は、統一的節制ある行動の下に活躍するの意味なればこれが完成設立の上は、吾等に多くの資料を興へられ

伊藤	實樹	森川	會慶	秋葉	日度	井口	善叔	森川	寛行	中村	乾信	金坂	義隆
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

日蓮 聖人 御遺文講義

(第二卷)

明治四十二年八月廿五日發行

●一册定價 郵送料共金三十錢 ●見本入用の仁 ●前金申込 ●郵券謝絶

●講義

●佐後第二通 四條金吾殿御消息 (御遺文、六頁) (完結)

●附錄

●御遺文注疏 錄内啓蒙 (卷一) (未完)

●近時江湖の間に大に掲げられたる日蓮聖人研究の聖に促され其の唯一機關として本講義は發行せられたり
●本講義は先づ佐後の御遺文より之を開始し、逐次卷を進めて竟に御遺文全篇の講了を期す
●本講義の講師は斯學の蘊奥を窺められたる宗門の老大家清水梁山師にして、其説や穩健にし且つ公平に、決して門流の自他に偏せず、新章亦平易にして在俗を問はず何かなる人にも領解し得らるべきなり
●本講義は明治四十二年六月廿日第一巻發行、自後引續き毎月廿五日を期日と定む

發行所 振替貯金口座番號東京二八六六 唯一佛敎團
大賣捌所 振替貯金口座番號東京二二六八 日宗新報社

日蓮聖人の實歴

全壹册

謹告

吾人は日蓮聖人の主義擴張の爲に百萬の味方たる本書を編せんとして博文館に交渉の結果漸く製本し得るに至れり其内容は聖人の主義と人格を緊密に論明して近時聖人尊重の思潮を喚起したる高山博士の四大文章(況後録、日蓮上人とは如何なる人ぞ、日蓮と基督、日蓮上人と日本國)と聖人の自傳的遺文を合輯したるもの聖人の傳と教義を簡明に知らしむべく學校役場等中流人士に讀本して絶好なるは勿論國家人生眞佛敎の關係と價値を解せんとする者必ず一讀すべき良書也希望者は實費二十錢(郵券代用二十五錢)を送られよ特に數十冊使用者の照會を俟つ、妙道宣揚邪法廢滅の爲

岡山縣勝田郡飯岡村 本經寺 高田日暢

本書の實價に對し前廣告に誤植ありしは校正の粗漏につぎ讀者の御諒解を祈る

活版石版寫眞版 御名刺印刷

ゴム印木版彫刻 丙號寸法巾一寸五分 長三寸八分 金廿二錢

印刷書籍帳簿 右の外紙質并に寸法等は御好みに隨ひ各種有之候間電話又はハガキにて御注文あれば市内は出來の上持參可仕候

製本調進 地方は郵送料金四錢要す

調製所 京橋區大 北澤活版印刷所 (電話本局三三八一番)

豫約募集

●内容 月次例會 講演錄合輯 夏期講習會

●体裁 菊版五號活字十四行三十三字詰約六百頁振假名附裝釘總クローズ金文字入、印刷鮮明体裁優美

日蓮天晴會講演錄 第壹輯

●正價金一圓五拾錢 豫約金一圓 遞送料十二錢

●豫約申込期限九月三十日限り、豫約金遞送料相添發行所宛申込ひべし、期限後は正價に復す

●製本出來、十月中、申込順に依り發送すべし

●發行所 東京市淺草區新谷町一四 天晴會事務所

注意 裏面を見よ

計算の時期に際し帳簿整理の都合有之購讀料御拂込相成度願上候 多年御愛讀を蒙り候讀者諸君にして漫然其儘に相成居候向き往々有之、斯くては傳道の機關に障害を及ぼし候條これ又御諒察の上此際至急購讀料御拂込相成度偏に願上候 統一團會計部

帝都に於ける同信一團の士、先に日蓮上人の大主義大人格を研鑽するの志を以て、天晴會を組織するや、天下の視聽翕然として之に向ひ、或は書を寄せ或は人を介し、月次の講演を公開せよ、機關雜誌を發刊せよ、會員たることを許せ、各地に支部を設置せよ、巡回講話を開け等と申込むもの續出し、殆んど應接に遑あらざらんとす、嗚呼是れ物質的悪文明に厭倦を生じたる時代必然の要求にあらざるか、世上幾多の煽動主義の成効論や、寂滅主義の消極的安心や、薄弱なる修養説等に飽き足らずして、眞乎に根底ある偉大なる活力ある、本化高遠の靈光に浴せんとする求道熱の爆發にあらざる乎、天晴會起つてより僅に數閱月、會員悉く圓隔なる學問を脱し、偏狹なる派別觀念を去り、日本國の魂、一切衆生の師父たる日蓮聖祖の人格及主義を四方八面より研鑽論究し、近くは會員互ひに自己心胸の光明を開き、進んでは世間求道者の渴望を醫せんとを期せり、此の間、月次の例會に於て、發表演説に於て、會員の講演を試むるもの廿餘回、又嚮きに聖祖獅子吼の跡たる相州鎌倉の地に、夏期講習會を開き、一句の間大に妙乘を講じ盛んに上人を敬讃す、是等の講師は悉く天晴會員にして皆是れ當代の名家、至誠敬虔なる聖祖鑽仰の同志なり、講ずる所は各自多年の蘊蓋を傾け誠意鑽仰の熱血を瀝きたるものにして、時代救済の福音なり、萬年救護の餘光なり、此の如くにして前後講演の筆記録に上れるもの危然堆積す、今や渴者の爲に清涼の水を與へ、餓者の爲に法悦食を薦めんと欲して、茲に天晴會講演録第一輯を公にするに至る、文章は口語を速記したるものにして頗る平易なり、而も振假名附なれば何人にも領解し得らるべし、若し夫れ一たび本書を繕んか、親しく講師の聲骸に接して醇々の慈教を蒙るの感あらん、滿天下求道の志士よ、速に一本を求めて座右の寶典とせよ、

本書の内容

月次講演の部

- ◎ 法華經及日蓮上人に對する予の態度……………東京帝國大學教授文學博士 姉崎正治
- ◎ 阿含と法華經……………大僧正 本多日生
- ◎ 阿含法華に對する日蓮上人の意見……………「唯一佛教」主筆 清水梁山
- ◎ 大 日 本……………日宗大學講師 高島平三郎
- ◎ 情の日蓮上人……………東洋大學講師 境野黃洋
- ◎ 日蓮上人の人格と其教義……………衆議院議員 鈴木天眼
- ◎ 日蓮主義より見たる加藤清正……………海軍大佐子爵 小笠原長生
- ◎ 我帝國と妙法五字……………「唯一佛教」主筆 清水梁山
- ◎ 法華經壽量品に對する台日兩祖の異點……………「妙宗」主筆 小林一郎
- ◎ 解脱の二方面……………東京帝國大學講師文學士 小笠原長生
- ◎ 國力護持論……………文學博士 川上多助
- ◎ 鎌倉時代の人情……………文學博士 三宅雄二郎
- ◎ 日蓮上人に對する感想……………文學博士 小笠原毅堂
- ◎ 日蓮上人と深草元政……………大僧正 本多日生
- ◎ 日蓮上人に對する誤解に就て(其一)……………參謀本部員步兵少佐 井上一次
- ◎ 暹羅國の佛教觀……………參謀本部員步兵少佐 井上一次

統

一



第百七十六號